青梅市文化財ニュース

第267号

平成22年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

正月には餅をつくなよー

今から9年前、平成13年1月15日号「広報おうめ」の「青梅再発見105」に「正月の三が日餅を食べない風習」と題した一文を掲載しました。当時それを読んで、世の中にはよく似た話があるものだと思ったという方から、このほど電話がありました。奥多摩町川井(旧古里村)で大正12年に生まれ、青梅市に嫁いできたKさんです。以下は、Kさんが小学生の頃、父方の祖母から聞いた話です。父は明治24年生まれで長男ということなので、祖母は明治初年頃の生まれでしょうか。

Kさんのおじさん(父の弟)は、北小曾木の^{あかにた}赤新田のある家へ婿入りしました。その地区では、オオカミ様が「正月には餅をつくなよー」とよぼわるからといって、正月の餅をつかない慣わしになっていました。それにはこんな事情がありました。

歳末近い時期にこの地区のお大尽さんの家で嫁とりがあり、いくら慣わしとはいえ、こんな時くらいはいいだろうといって餅をつき始めると、^{かまど}竈から火が出て家が丸焼けになってしまいました。土地の人は、やっぱり正月の餅はつかねえもんだといって、家では餅をつかない風習は続いています。食べるのは問題ないようで、Kさんの家ではついた餅を赤新田のおじに届けていたということです。

ちなみに、小学生のKさんは赤新田のおじさんの家へ時々お使いに出されました。風呂敷包みを肩から脇へ斜めに背負って、家から歩いて御嶽駅へ、御嶽駅から軍畑駅までは電車で、そこからは歩いて平溝から榎峠を越え白岩を歩いて行きました。

以上は昭和の初め頃までの話です。現在はどうなのかと思い、北小曾木、現在の成木八丁目に在住の方に聞いてみました。すると「赤新田」とその隣の^{えびさわ}「蜷沢」の二地区全戸でこの慣わしがあり、今も正月の餅をついていないといえます。今では、古老といっても72才くらいの方が最高齢で、詳しい話は分からなくなっていますが、「昔、餅をつこうとして竈で火を燃すと火事が起きた」、「餅をつこうとした“おだいじんこ(お大尽)”で2年続けて不幸があった」から、正月の餅はつかないと聞いているということで、現在もそれを守っています。親戚から貰ったり、店についてもらったりした餅を食べるのは大丈夫で、また、餅をつくのも小正月が過ぎれば良いといえます。なお北小曾木の他地区では、まった

くそんな慣わしはないということです。

伝承を繰り返すうちの結果なのでしょうが、なぜオオカミ様がよばわったのかについては、今となっては分かりませんでした。慣わしが守られ続けていることに敬服します。

なお「広報おうめ」に掲載した「正月の三が日餅を食べない風習」では、^{あざおまくら}字小枕・現在の黒沢一丁目が住の大越姓を名のる 11~12 軒の家々で守られている、以下の、これも貴重な慣わしを紹介しました。

むかし、福島県郡山、JR 磐越東線の大越駅辺りにあった大越城で、正月三が日は敵は攻めてこないだろうと、油断して餅を食べていたところ、落城してしまった。一族は、千葉方面と埼玉方面と、この黒沢の地へ落ち延びて来た。それ以来、正月三が日に餅を食べると不幸があるといわれて、今でも食べない慣わしになっている。そんな馬鹿なことがあるかといって、三が日に餅を食べると、餅を焼いている^{かまど}竈が割れたり、身内が亡くなったりしたので、大晦日の除夜の鐘が鳴り始める前に、ついた餅は目に付かない所へ隠されてしまった。近所の人が届けてくれる餅は食べても良いようで、子どもの時分に「うちの中ではなく、外で食べろ」と言われ、道路っ端でおっかなびっくら食べた思い出がある。今では、食べてもどうってことはないと思うが、この風習は守られ続けている。

(文責 三好 ゆき江)